

# 日中関係の緊張を解くカギは 鄧小平の描いた発展戦略にある

エズラ・ヴォーゲル氏 (ハーバード大学名誉教授)

## 現代中国の父

私は、アメリカ国民にもっと中国のことを理解してほしいという思いから、鄧小平やその時代について研究してきました。

1904年に四川省で生まれた鄧小平は、10～20代でフランスやソビエト(モスクワ中山大学)に留学し、若い頃から世界情勢について理解を深めていました。毛沢東への忠誠心も厚く、1949年に国民党との内戦を指揮して勝利したり、文化大革命(1966～1977年)が起るまでの10年間は、共産党総書記として政務を統括しました。毛沢東は理念を掲げて階級闘争を進めようとする人でしたが、鄧小平は現実的かつ実務的な思考で政治を動かすタイプです。

鄧小平は生涯に3度失脚しましたが、3度とも政治の表舞台に復帰しています。1974年には中国の指導者として初めて国連総会で演説を行い、毛沢東が亡くなった翌年の1977年からは、改革開放政策に従って工業、農業、防衛、科学技術の「4つの近代化」を強力に推進しました。なかでも科学技術の向上を重視し、鄧小平はノーベル物理学賞を受賞した中国系アメリカ人らを度々北京に招いて話を聞いています。教育改革にも力を注ぎ、大学入試制度を導入してエリート教育の基盤を築きました。こうした発展戦略を推進したことで、鄧小平は「現代中国の父」と称されています。

## 鄧小平外交で変わったこと

1978年10月、鄧小平は中国の指導者として初めて日本を訪れ、昭和天皇と会談しました。天皇陛下が第二次世界大戦について「不幸な出来事」と言及されると、鄧小平は「これからは両国の平和と友好のために貢献したい」と応じました。中国の宝山製鉄所のモデルとなった新日鉄君津製鉄所を視察した際には、その記念に中国語で「日中友好の協力への道はますます広がる。我々は共に努力しよう」と揮毫しています。また、日中国交正常化(1972年)に大きな役割を果たした田中角栄元首相の私邸を訪問。当時、田中角栄はロッキード事件で自宅拘禁中だったため周囲が難色を示しましたが、鄧小平は「水を飲むとき、井戸を掘った人のことを思い出すべき」という中国の諺を出して実現しました。大阪では松下電器産業の工場を視察しています。この訪日を機に、日本の小説や映画なども中国に紹介され、中国人の日本への思いが良くなりました。

また、1978年12月に米中国交正常化が表明されると、翌79年1月、鄧小平はアメリカを訪問し、行く先々で大歓迎を受けました。テキサスのロデオ会場では、馬に乗った女性



からカウボーイ・ハットが差し出され、彼はそれを笑顔で被って見せました。このニュースは全米に伝わり、米国民に「鄧小平は共産主義者だが、我々と同じユーモア精神を持った人間であり、彼とは友好的に交渉ができる」という気持ちが芽生えました。これは中国でも話題になり、中国国民は鄧小平がアメリカで楽しそうにしているのを見て、今まで「アメリカ帝国主義」と呼び嫌悪していましたが、これからはアメリカの文化や生活様式に学んでもいいと思いはじめたのです。

## 戦後の日本を理解すべき

現在、中国は尖閣諸島問題で強硬な態度に出ています。かつて鄧小平は、この問題を棚上げし、日中の友好関係の構築を優先すべきだと考えていました。しかし、その思いに反して、近年の日中関係は悪化の一途にあります。私はその原因の一つに、中国における愛国教育があると思っています。1989年の天安門事件の後、中国の指導者は、若者たちが東ヨーロッパやソビエトと同じような民主化革命を起こすのではないかと恐れました。そこで国民の愛国心を高揚させることで、共産党一党独裁体制への批判をかわそうとしたのです。そのもっとも効果的な方法が「反日」でした。戦争で日本に苦しめられたことばかり教え、「日本叩き」を煽ったのです。もう一つは、GDPで日本を追い抜くほど中国が経済力を高めてきたこと。これに慢心する一部の指導者や学者などが、外交政策はもっと強硬であるべきだと言い始めました。

私は、鄧小平が生きていたら、こうした高慢な政策を絶対に許さなだらうと思います。私は2013年4月、中国各地で鄧小平について講演し、日中友好を重視した鄧小平の思いや、日本が第二次世界大戦後に軍国主義から平和主義へと変わったことなどを理解すべきだと指摘しました。今こそ、鄧小平が求めた「お互いの利益になる友好関係」が必要だと思います。